2022 年 12 月 16 日　NO.635

「御同朋の社会をめざす運動」東海教区委員会　広報部
〒460-0018　名古屋市中区門前町1番23号
東海教区教務所内
TEL 052-321-0028　FAX 052-332-4097
e-mail　info@tokai-hongwanji.net

東海教区桑名組　活動報告

令和 4 年 10 月 19 日（水）柿安シティホール（桑名市民会館）にて「親鸞聖人の歩みとみ教え」と題し、親鸞聖人御誕生 850 年・立教開宗 800 年慶讃法要記念のお待ち受け行事を執り行いました。

この度の行事は、親鸞聖人の歩みをあらためて訪ね、いままで浄土真宗のみ教えに馴染みが薄かった方にもお念仏の慶びを知っていただこうとの思いでスタートしました。

ご講師には本願寺派司教の井上見淳先生、講談師の旭堂南雲先生をお迎えしました。お二方とも行事の趣旨に賛同いただき、快くお引き受け下さってありがたいことでした。

コロナが落ち着かない中での開催だったので、そもそも開催してよいものか判断に迷うところもありましたが、座席の間隔をあける、換気を良くするなどの工夫をしました。お勤め（重誓偈）にはじまり、南雲先生の講談、井上先生の講演、最後に恩徳讃といろいろな角度から浄土真宗のみ教えに触れていただくことができました。コロナの影響もあって久しぶりの大きな行事だったためか、「仏旗どこに立てよう」「菓子皿や紙コップが用意されていないよ」「座布団はどうするんだったっけ」など準備に戸惑うこともありましたが、なんとか終えることができました。またお隣の朝明組様からはホールに掲げる大きなお名号などをお借りできましたこと、あらためてお礼申し上げます。

行事の後、何人かのご門徒さんとお話する機会がありましたが、「良いお話でした」「わかりやすかったです」「楽しかったです」など感想をいただき、みなさん喜んでみえました。これを機会に来年の団体参拝や日頃の法座への参詣につながれば良いなと思いました。

Contents

桑名組活動報告	P1
こころばなし	P2
声	P3
特集	P4.5
本山参拝	P6
御伝鈔解説	P7
お坊さんの書棚	P8

『わたしのすがた』

草薙　善照（員弁組照順寺）

新型コロナウイルスの感染拡大で、私たちの生活は一変しました。マスクは手放せず、手洗いと手の消毒を何度も行い、ちょっとした外出ですら躊躇するようになりました。密、クラスター、などの聞き慣れなかった言葉は当たり前になり、葬儀・年忌勤めは様変わりしてしまいました。

ともあれ人類の歴史は、感染症との歴史ともいわれるそうです。100 年以上前にはスペイン風邪という流行病があり、新型インフルエンザや SARS などは記憶に新しいです。

また、蓮如上人のご生涯の間にも、10 数回の流行病があったといわれています。四帖第九通に『疫癘章（えきれいしょう）』という御文章が示され、当時の混乱した様子が読み取れます。蓮如上人が見られていた、室町時代の人々の混乱は、どの様であったのでしょう。ウイルスの研究、医学、情報伝達が発達した現代に生きる私たちですらただただ怯え、右往左往するばかりでした。ましてや室町時代の混乱は、想像しても思いが及びません。

新型コロナウイルスの蔓延により、心ゆさぶられた私たちの姿を省みると、本性がむき出しになり、褒められたものではありませんでした。根本的な三つの煩悩は「三毒」といい、「貪欲」「瞋恚」「愚痴」の三つとお聞きしています。

「貪欲」とは、貪りの心、欲しいものに執着する心のことです。「瞋恚」とは、瞋は怒りと読み、腹を立て怒り狂うことです。「愚痴」とは、愚かであり真理をしらず、物事の是非の区別がつかないことです。

思い返せば、マスクなどの買い占めが横行し、高価転売され、これは『貪欲』と思えます。また自粛警察、マスク警察といわれ、揉め事も起こり、いがみ合った心の風潮は『瞋恚』とも思えます。間違った情報におどらされ、さらには間違った情報を拡散し、他者への思いやりに欠けていた姿は『愚痴』とも思えます。そして、自分の考えや思いが当たり前で当然なのだというとらわれの心から、自身を省みる心を失い、他のいのちを軽んじ傷つけ、さらには自分自身のいのちも傷つけていくのではないでしょうか。

親鸞さまは煩悩だらけの自らを「恥ずべし、傷むべし」とおっしゃいました。阿弥陀さまは、煩悩に振り回された生き方しかできない私を見抜き、お念仏こそが本当の拠りどころであったと気付かせてやりたいとはたらいてくださっています。そして、み教えは私の姿をうつす鏡とお聞きします。み教えを拠りどころとし、阿弥陀さまのはたらきを聞かせて頂き、お念仏を申し、感謝の思いのなかで生かさせて頂くことで、自分の姿を見つめ直すことが出来るものと味わいます。窮屈で不都合ばかりの状況だからこそ、自分の不確かさを知り、疑い合うのではない、いのち支えあう日々を送って行きたいものです。

『紅葉シーズン』

自坊は木々に覆われていて、紅葉シーズンはとても見応えがあります。

カエデ、サクラ、ハナミズキ、ケヤキ、イチョウ、クリ、ドウダンツツジ……色づいてくると秋の訪れを感じます。

だんだんと冷えてきた快晴の早朝、朝日を浴びて金色に輝くケヤキの美しさや、雨上がりに、そこだけ浮き上がったような鮮やかさを見せるモミジなど、ハッと息をのむ美しさがあります。

美しい紅葉の後には落葉がつきものですが、積もった落ち葉を掃いていくのも、気持ちのよいものです。

けれど落葉がピークになる頃には、掃いても掃いても、次から次へと葉が落ちてきます。

やっと掃き終わったと一息ついているときに、風が吹いて、あっという間に掃除の前より落ち葉が溜まってしまうこともあります。そんなときは徒労感を感じます。お掃除をする中でおさとりになられたチューダパンタカのお話のようにはいきませんね。

とはいえ、近隣の道路脇にも積もってしまいますから、この時期はコツコツ落ち葉掃除の毎日が続きます。

『手のひら返し』

最近、インターネットのニュースで印象に残った記事がありました。「森保監督ごめんなさい、日本代表への手のひら返し」と題した記事です。

読んでみると記事の内容は、サッカーのワールドカップに出場した日本代表が、強豪国との試合で下馬評をくつがえして大金星をおさめたというものでした。それまでの日本代表の成績は芳しくなかったからか、世間から厳しい声があがる中、強豪国との試合に勝利をおさめたことで「監督の指導が正しかった」と、がらりと変わったサッカーファンの姿勢を〝手のひら返し〟という言葉で表現されていました。

一見、微笑ましい記事ですが、一方で、私たちは普段から、いかに厳しい目で他人をみているのかを教えてくれている記事でもあると感じました。

語源を無視した、私の独特のイメージですが、皆さんは、身近な人を自分の手のひらの上に乗せていませんか？

よくやった！さすがだ！と思うときは、手のひらの上に乗せた人を高く持ち上げますが、失望した！ダメなやつだ！と思った途端に、手のひらを返して相手を下に落とします。そして、手のひらを返したとき、私は何の悪気も感じていないのです。

同朋研修会で「仏教を学ぶということは、人の痛みのわかる人間になることだ」と聞かせていただいたことがあります。仏さまの教えを聞くなかで、少しでも人の痛みをわかろうとしない自らの愚かさに気づき、他者の痛みを感じて、思いやりをもって行動したいものです。

～特集～

どんなものを
お渡ししてますか？

いただいて
嬉しいものは？

参拝記念品

―「ようこそお参りくださいました」
「この度の法要では こんなことをお伝えしたい」

他のお寺さまは何をお渡ししてるんだろう…？ なかなか聞く機会のない「参拝記念品」「ご法中へのお礼」についてまとめてみました。

各寺院の

「親鸞聖人御誕生850年 立教開宗800年慶讃法要」や報恩講など ご参考になれば幸いです。

本願寺の一筆せん

ボールペン

おおくのみなさまの

食事のことば はし

報恩講

施本

オリジナルバッグ

お寺のクリアファイル

オリジナル

これぞ定番！

お念珠

何年も前にお渡ししたものを「使ってますよ」のお声が嬉しいですね。

腕輪念珠

○○寺

寺又は個人の名入り
ふろしき・お袈裟ケース
お盆 など

自分の名字入りは嬉しいし、他のお寺さまとかぶらないですよ

和ろうそく

絵入りもあるよね

経本入れ

式章

式章入れ

塗香
（少量にして）

包い袋つき
名刺入れ
念珠袋

布香合
（小物入れにしても○）

白帯 （必需品!!）

地元推し！

近くのお店の銘品

パン

どら焼き

防災グッズ食品

ロングライフパン

笛つきミニライト

ジップロバッグ

防災に役立つ情報・使い方
解説つきでお渡しします

お酒

手書きラベル

珍しい!!!

うみたて卵

おお♪

ケーキ屋のご門徒さんに依頼！

クラフトコーラ

さっぱりスッキリ

地元野菜を使ったコーラの素

とろろ昆布

ふりかけ

ジャム

ご当地もの嬉しい♪

東海教区
寺院女性の皆さま

うちはこんなものを

「お寺マダム」の皆さま

こういうのもあり♪

※お寺マダム
浄土真宗各宗派の坊守(20～40代)のオンラインサロン。テーマに沿って話し合ったり、暮らかの困りごとには助け合ったりしながら活動中。

ご協力ありがとうございます!!

編集部員
名古屋組 教西寺
三宅 千空

西本願寺にお参りしてきました

新型コロナウイルス感染症が世界中で流行して今も様々な行動が制限されています。お寺の活動においても同じですが、徐々にコロナ以前の活動に戻りつつあります。そんな中、ご縁が整いご本山に続けてお参りすることができました。

①住職補任式

昨年３月に所属寺の住職を継職し今年の 10 月の補任式を受けることに決めました。ご本山への申込やホテルの予約なども終わり、後は当日を待つばかりだったのですが、補任式の２週間前にご本山から電話が。また感染者が増えてきたので、より万全を期すために補任式当日には抗原検査をしてから参加するようにとのこと。抗原検査キットを持っていなかったので当日までに買えるのか不安になりましたが、無事近くの薬局で購入できました。申し込み時点か、もう少し早くに検査のことを知らせてくれると焦らずに済んだのにとの思いもありましたが、当日も検査で陰性だと分かった上での参加だったので安心できました。

当日は全国から 65 ヵ寺 140 名の参加があり、それぞれがお寺と宗門を盛り上げていく仲間だと心強く思うと同時に、知り合いにも再会できたのが嬉しくもありました。初日に行われた補任研修では、現代社会の中で公益法人であるお寺の住職として果たすべき役割や責任についてや、今後のお寺の運営に対する宗派のサポート、住職も何より一人の念仏者としてお念仏を聞くことを大切にして欲しい、など改めて大切なことを聞かせていただきました。二日目の補任式は厳粛な雰囲気の中でご門主より任命状を拝受いたしました。総代さんも一生に一度の晴れ舞台でしたね、と喜んでくださいました。

補任研修の様子

初参式にて

②初参式

普段から仲良くしてもらっている僧侶仲間３家族で初参式を申し込みました。ご本山では毎月 15 日に「なごみの日」として子どもを中心とした家族参拝が実施されていますが、予定が合わなかったので別の日になりました。当日は受付を終えると、御影堂での参拝・焼香、ご法話でした。一緒にお参りしたご家族の子どもさんはどちらも１歳、我が家の息子は５歳ということで「さすがお兄ちゃんは違うね」という姿を見せてくれると期待したのですが、お焼香の順番が回ってくるとハッキリと嫌だと主張しご法話は上の空でした。父親によく似た息子に育っていることを実感しつつ、「私が気づく前、喜ぶ前から阿弥陀様がはたらいてくださっていた」とのご法話がひとしお響きました。

手を合わせお念仏は申す生活は送っているけれども、普段は日常に流されてそのことをなかなか意識しない中、今回ご本山にお参りして改まった儀礼の場に身を置く嬉しさを感じました。ご本山とは規模もできる事も違いますが、自坊でもそれぞれの人生の区切りなどでの参拝を勧めていきたいと思います。

加藤学（桑名組善徳寺）

第一幅 第二段「吉水入室」

比叡を下りられた29歳の親鸞聖人は、京都東山の吉水の禅坊を訪ねられ、法然聖人より念仏往生の教えを聞かれ、凡夫直入の深意を領解され信心決定されました。この第一幅第三図には比叡山の僧侶である証（あかし）の白い袈裟衣の親鸞聖人と、隠遁生活である証（あかし）の墨袈裟衣の法然聖人が描かれ、対面の様子が伺えます。御絵伝の描き方の特徴の一つである異時同図画法が採用されており、親鸞聖人は対面前と対面時の二回描かれております。門の外には輿が描かれていて親鸞聖人は輿で来られてから対面へと動線がわかるのもこの場面の特徴です。

第一幅 第三図（本願寺名古屋別院蔵）

次は、第四図「六角夢想」、第五図「蓮位夢想」と続き、夢のお告げの話しが描かれます。親鸞聖人のご生涯を辿るのなら、「六角夢想」→「吉水入室」の方が自然ではあります。

『恵信尼消息』第一通には「山（比叡山）を出でて六角堂に～九十五日のあかつき聖徳太子の夢告を経て法然上人の元へ～」と読みとれます。また、「蓮位夢想」は後に加筆されたという伝承もあります。

出家学道～親鸞聖人の幼少期からの成長過程が伺えますが、この「蓮位夢想」の親鸞聖人は御歳 84歳の時の蓮位坊の夢告の出来事であります。晩年の親鸞聖人が、黄丹袍（おうにのほう）（太子のみ着用できる礼装）姿の聖徳太子から御敬いされる夢で、親鸞聖人が阿弥陀如来の化身であるというお話です。このような流れを見ますと、一幅目から想像もつかないような展開であることが窺えます。

また当時の方々にとっての「夢告」というのは、大きな意味を持っていました。科学的に解明された現代とは異なり、中世社会においては、夢とは人の意識によって左右できないもので現実世界に比べ、とても「純粋なもの」とされていました。親鸞聖人も、今まで歩んで来た人生と、これから歩もうとする決断、法然聖人を訪ねようとするとき、夢告という後押しが欲しかったのかもしれません。

第一幅 第五図（本願寺名古屋別院蔵）

第一幅を振り返りますと、「吉水入室」の40歳年上の法然聖人との御対面、親鸞聖人はどのようなお心持ちであったのか、想像するだけでこちらもドキドキ致します。

藤野和成（桑名組教宗寺）

~お坊さんの書棚~

『LISTEN―知性豊かで創造力がある人になれる』

ケイト・マーフィ【著】篠田 真貴子【監訳】松丸 さとみ【訳】日経 BP【出版】

本書『LISTEN』は、「聞く」ことについて、人の認知や心、職場や家族の人間関係、そしてスマートフォンが生活に深く入り込んでいる現代の社会といった観点から描いた著作です。(「監訳者はじめに」より)

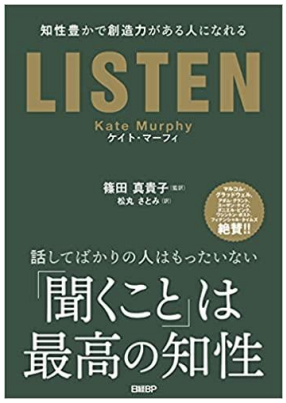
僧侶も「聞く」ことの大切さについて語られることが多い昨今です。「LISTEN」とは能動的に「耳を傾ける」という意味があります。「人の話を聞くというのはどういうことなのか」「今まで私は話を聞くことができていたのか」、そんなことを考えさせられました。

豊富な聞き取りによるさまざまな事例や、スマートフォン、SNS といった近年のコミュニケーションの中での話題など、ハッとさせられるトピックが詰まっていて、気づきを与えてくれる一冊です。

追記になりますが、本書は目次を見ているだけでも楽しめます。

「つまらないギャグをいう人は大抵人の話を聞いていない」

「『自分の聞きたいようにしか聞かない』人はだまされやすい」など、クスリとさせられたり、読んでみたくなったりするとても面白い目次です。手に取った方は、目次もお楽しみください。



~お坊さんの書棚~

『「わかりあえない」を越える 目の前のつながりから、共に未来をつくるコミュニケーション・NVC』

マーシャル・B・ローゼンバーグ【著】今井麻希子・鈴木重子・安納縣【訳】

皆さんは、どうしてもわかりあえない相手はいませんか。一人ひとり育ってきた環境が違えば、性格や価値観も人それぞれで、わかりあえないことは当たり前だという思いはないでしょうか。わかりあえない苛立ちが相手に対する非難や批判になれば、他者との対立を生み、それが国同士の暴力的な対立になると、戦争や紛争といった社会問題に発展します。

臨床心理士学の博士であるマーシャル・B・ローゼンバーグ氏は、私たちが日常で使う「言葉」が、自分自身や他者・世界の捉え方にどのような影響を及ぼしているのかに注目して、NVC（非暴力コミュニケーション）を考案されました。本書はマーシャル博士の NVC の実践方法を紹介した一冊です。

マーシャル博士は、私たちが暴力的な言動をとる背景には、「何が正しく、何が間違っているか」という捉え方にあり、「間違っているものは正されるべき」という考え方から暴力を正当化する言動が表れると指摘されます。

対立する者どうしが対話をするためには、自分の内面で何が息づいているのか、何が満たされていないのかに意識を向けて、〝平和のことば（Speaking Peace）〟を用いながら、相互に思いをやりとりする必要があるといいます。

書籍の中で、NVC の実践は「観察」、「感情」、「ニーズ」、「リクエスト」の４つの項目に分けて説明されています。具体的な事例を挙げて、注意すべきことや意識すべきことが詳しく書かれてありますので、自分自身の生活の中で活用しやすいのも本書の特徴です。わかりあえない人とわかりあえたとき、嬉しさと共により豊かな視野が開けるかもしれません。ぜひ一度手に取って読んでみてください。